

『如来滅後五五百歳始観心本尊抄』

(新編御書・六六一頁)

『如来滅後五五百歳始観心本尊抄』御眞蹟

御眞蹟対照

天台云見雨猛知龍大花盛池深等
 云云妙樂云智人知起蛇自識蛇等
 云云天晴地明識法花者得世法敷
 不識一念三千者佛起慈悲五字
 内裏此珠令懸末代幼稚頸四大
 サ守護此人太公周公撰扶文王
 四陪侍奉惠帝不異者也

文永十年大才
 癸酉卯月二十五日

日蓮註之

見知
天台云見雨猛知龍大花盛池深等

云云妙樂云智人知起蛇自識蛇等

可
云云天晴地明識法花者得世法敷

大
不識一念三千者佛起慈悲五字

内裏此珠令懸末代幼稚頸四大

サ守護此人太公周公撰扶文王

四陪侍奉惠帝不異者也

大才
文永十年 癸酉卯月二十五日

日蓮註之

(書きくだし文)

天台の云はく「雨の猛(たけ)きを見て龍の大なるを知り、花の盛んなるを見て池の深さを知る」等云云。妙樂の云はく「智人は起を知り蛇(じや)は自ら蛇を識(し)る」等云云。天晴れぬれば地明らかなり、法花を識る者は世法を得(う)べきか。一念三千を識らざる者には佛大慈悲を起し、五字の内に此の珠(たま)を囊(つつ)み、末代幼稚の頸(くび)に懸(か)けさしめたまふ。四大菩薩の此の人を守護したまはんこと、太公・周公の文王を撰扶(しよろぶ)し、四陪(しこう)が惠帝(けいてい)に侍奉(じぶ)せしに異ならざる者なり。

文永十年大才(たいさい) 卯月二十五日
癸酉(みずのととり)

日蓮 之を註す

(通解)

天台大師は法華文句の中で、「雨が激しく降るのを見て、雨を降らす龍が大きいことを知り、蓮華が勢いよく咲いているのを見て、その池が深いことを知ることができる」と述べております。また、妙樂大師は法華文句記で、「智人は起(こ)りを識り、蛇は蛇の通り道を知っている」と述べています。晴天になれば地上のことも良く見えるようになります。法華經の心を知ることができたならば、世法においても先々を見通す徳を得ることができるようになります。

仏は大慈悲を起(こ)されて、一念三千を知らない者に対して、妙法蓮華經の五字に一念三千の悟りを包まれて、末代幼稚の私たちの頸に懸けられたのです。上行菩薩・無辺行菩薩・淨行菩薩・安立行菩薩の四大菩薩が、妙法五字を頸に懸けて頂いた人を守護して下さることは疑いありません。それは、太公や周公が文王の政を助けたのと同じように、また、東園公(とうおんこう)・綺里季(きりき)・夏黄公(かこうこう)・角里先生(かくりせんせい)の四陪が惠帝に使えたのとまったく変わることはありません。

(ポイント) 御眞蹟から、「佛起慈悲」と御認めになった後、「大」を書き加えられたことを拝することが出来ます。このことから、南無妙法蓮華經の御本尊様を首に懸けて下さる日蓮大聖人様のご慈悲は「大慈悲」、つまり「最高最大の慈悲」であることに気づきます。最高最大の慈悲をもって私たちを導いて下さるお言葉です。私たちの立場から拝すれば、仏様の最高最大の功德を受けることが叶う大御本尊様の信心である、ということ。ゆえに、総本山二十六世日寛上人が「暫くもこの本尊を信じて南無妙法蓮華經と唱うれば、則ち折りとして叶わさるなく、罪として滅せさるなく、福として来らさるなく、理として願はさるなきなり」と御指南下さるのです。大聖人様の慈悲を強く信じて、自らと周りの方のために、三千べルツの行動を貫きましよう。